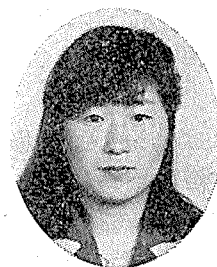


女性から見たPC構造物

コンクリート構造物は誰のもの？

天 野 玲 子

(鹿島建設技術研究所)



土木構造物の雄大さに憧れて土木屋になり、コンクリート構造物と取り組んで約八年。技術研究所の一員として、現場のお手伝いをしてきました。現在のコンクリート構造物は、鉄筋コンクリートばかりでなく、プレストレストコンクリートにおいてもその技術が発展・普及したことで、機能的、経済的になるとともに、急速に大型化しその威容を誇るようになってきています。微力ながら、私もこのようなコンクリート構造物の建設に携わってきており、自分の関係したコンクリート構造物が完成した姿を見た時の、土木屋ならではの、あの感動的で充実感溢れる気持ち、まるで手塩に掛けた我が子が成長した姿を見るような気持ちを幾度か味わうことができました。

この度、プレストレストコンクリート編集委員会から「女性から見たプレストレストコンクリート」と題しての依頼がありました。しかし、プレストレストコンクリートについて特に深い知識を持ちあわせているわけでもありませんし、“女性からの視点”ということですら悩んだのですが、とうとう良い考えが浮かびませんでした。そこで、コンクリート構造物に対し、土木屋として、日頃感じていることを書かせて頂くことで代えさせて頂きたいと思います。

本来、土木屋は自然環境に手を加えることで、人間の生活や文化の基盤を作ってきました。しかもその仕事は、始めは土や砂や木や石といった天然材料を用い、自然環境と調和しながら人間の生活に密接に結び付いたものでした。

例えば、道路は、土や石で造られ、人間や乗物の往来

のために造られたものですが、ひとたび道路という空間ができあがると、それは単に交通機能を果たすだけでなく、いろいろな生活の場として活用されました。それは、子供が遊んだり、井戸端会議をしたり、散歩したり、また市場やお祭さえも開かれる場所だったのです。

ところが、近年になり、土木屋が鉄筋コンクリートの技術を持ちあわせるや、人間の生活、特に都市の生活が大きく変わりました。都市は土や木や石といった天然材料から離れ、コンクリート構造物で溢れるようになったのです。さらには、プレストレストコンクリート技術の進歩によって、巨大なコンクリート構造物が、都市以外にも随所に造られるようになりました。

この状況を、コンクリート構造物を扱う土木屋として眺めてみると、非常に誇らしさを感じる反面、なにか、成長した子供が手に負えなくなってしまったような不安を感じることがあります。それは、現在のコンクリート構造物には土木構造物として何かが足りないような気がするからなのです。

その“何か”とは、いったい何なのでしょう…。

まず、コンクリート構造物が出現した都市の変化は、戦後の高度成長期において、より急激なものとなりました。

二十一世紀を目前に控えた現在、我が国はかつてないほど経済的繁栄の時代を迎えています。これは、戦後の高度成長期に、人々が狭い住宅に住み、満員電車で揺られて通勤し、交通渋滞にいらいらして時間に追われながら、豊かな社会を目指して働いてきた結果です。

人間の生活には、住み、通勤し、仕事をする以外に、公共の空間や余暇のための空間が必要です。ところが、高度成長期には、効率の良さや機能的であることが求められ、公共や余暇のための空間は省かれてしまい、住み、通勤し、仕事をする空間でさえ、必要最小限度の機能、たいていの場合単一の機能を持つようなコンクリート構造物に委ねられてきたのです。そのうえ、高度成長期の社会の需要を満たすために、コンクリート構造物は、質よりも量を優先して大量に、しかも、(型枠に流し込めば、どんな形であろうとどんな大きさであろうと自由自在に造られるという利点を持っているにもかかわらず) 何の個性もなく画一的に造られてきたように思います。

例えば、高速道路の場合、生活に密着した多様な機能を持つ道路とは異なり、自動車交通というただ一つの機能だけを持つものになってしまい、道路空間から人間を追い出しているのです。そして、それは、自動車が増加するにつれて、ますます大量に、ますます巨大なものとなって、都市の空間を無骨で何の愛想もないコンクリート構造物で埋めるようになったのです。

もし、コンクリート構造物に対して、土木屋以外の立場からこのような文句を言われたら、きっと私自身憤慨することでしょう。

それというのも、交通手段やエネルギー施設を充実させることや、自然災害から生活を守ることは、是非とも必要なことですし、コンクリート構造物はその役目を充分果たしています。また、将来に向けて、よりいっそう人間の生活基盤の整備に活用されることも望まれているからです。

しかし、現実には、コンクリート構造物が、「コンクリート・ジャングル」という言葉に象徴されるように、緑を削り、都市を砂漠化し、人間のいろいろな生活の場とは何の関係もないものとなって都市に溢れるようになっていることも事実なのです。

また、近年、橋梁などで、技術の粋を集めた大規模なコンクリート構造物が造られるようになってきています。こういった構造物の場合、その単一の主要な機能だけでも人間の生活へ甚大な貢献をしています。その構造物が造られることで周囲の環境に非常に大きな影響も

与えています。それゆえ、自然破壊防止のための配慮や、周囲の景観に調和するための配慮などが強く望まれていますし、それなりの努力も払われるようになってきました。それでも、巨大な構造物の場合には、建設される際に技術的困難さを伴うことが多く、そのため、人間の生活に関わるような付加的な機能は切り捨てられるのが普通です。

ここまで考えてきて思い当たりました。そうです。今造られているコンクリート構造物は、単一の主要な機能のみを合理的、経済的に満たすことを追及するばかりで、人間の生活から掛け離れてしまい、生活に関連した親しみが感じられないのです。

経済が豊かになり、市場に物が満ち溢れてくると、人々はより質の高い豊かさを欲しがるようになってきます。その豊かさは、まず、生活の中の時間や空間におけるゆとりであり、美しい自然環境であり、また、さまざまな価値感に応える多様性とも言えるでしょう。

このような人々の要求は、当然コンクリート構造物にも反映されるべきではないでしょうか。

やはり、コンクリート構造物を含めて土木構造物は、人間の幸せな生活のためにあるものだと思います。

“美しい景観を持つ橋梁には、自動車道路と並行して、展望台を兼ねた広場があり、その広場からは周囲に広がる緑豊かな景色を楽しむことができる。また、橋梁の下には、公園やスポーツセンターやイベントホールなどがあり、橋梁全体が人々の憩いの場となっている”。

そんな橋梁があったら良いと思いませんか。

そして、このような構造物を造るためにこそ、(大きくて、軽くて、スレンダーで、細部にまで配慮が行きとどいたデザインの構造物を造ることのできる) プレストレストコンクリートの技術は生かされるべきではないでしょうか。

ここで、土木屋は、もう一度土木構造物の原点に戻り、コンクリート構造物を“人間らしい文化を作りあげる重要な基盤であり、人間と自然とを適切に繋ぐもの”として、考え直す必要があるのではないのでしょうか。私も、次世代に喜ばれる土木構造物を残すために、女土木屋として精一杯頑張っていきたいと考えています。